

第3節 文献史学からみた中世前期甲斐の寺院研究の課題

高橋一樹

はじめに

2008年度までの5カ年におよんだ山梨県内中世寺院分布調査（以下、本調査と呼ぶ）は、『山梨県史』の編纂が最終段階をむかえつつある段階で開始された。発掘調査の成果により年々、新しい資料と情報が蓄積され、研究の成果が更新されていく考古学に比べ、中世の文献史学では古文書を中心とした新出資料が頻繁に望める状況ではない。このため、広く県内外に散在する中世甲斐国関連の文字史料を現段階で網羅的に集成した『山梨県史』資料編4～7の刊行は、本調査に文献史学の立場からかかわる者にとっては最大の導きの糸となった。

『山梨県史』資料編中世の編纂にあたって、網野善彦は「甲斐の中世文書」¹⁾と題した総説でつぎのように述べている。山梨県内に現存する中世文書、またはある時期まで伝来していたことの確実な中世文書は、他県の状況と比較しても、鎌倉・南北朝期の文書、応仁・文明以前の室町期の文書がわずかな寺院・神社に例外的にしか残されていない。同時期の武家文書にいたってはほとんどみられない。一方、戦国期・織豊期（おもに16世紀）の文書は、写本や刊本の収録例も含めて膨大な数が残されている。こうした伝来文書の偏在性じたいに、甲斐中世史の特質を解明する重要な手がかりがあるのではないかと、と。

網野の鋭くて重い、この指摘を本調査に即して考えるならば、中世寺院を対象とする本調査の大きな課題のひとつは、そうした文献資料の制約を乗り越えて、考古学と文献史学などとの協業にもとづき、中世前期の甲斐における寺院の様相をできるかぎり把握することにあつたといえよう。網野の死後、『山梨県史』資料編中世の編纂が県外文書と県内外の記録に進み、近年の歴史学界で最も注目を浴びて研究成果をあげている寺院特有の史料群、いわゆる聖教・経典への目配りも現状で可能な範囲でなされたこと、とりわけ県内の寺院のみならず、後述する名古屋の大須真福寺所蔵聖教の奥書など、中世前期にさかのぼる甲斐国内の寺院をめぐる興味深い情報がまとまって紹介されたことは、上記の課題意識のもとに新たな研究を進めるうえで欠かせないポイントとなるものである。

本稿は、そうした『山梨県史』資料編の成果に多くを依拠しつつ、本調査が基礎データとした、19世紀に成立した近世甲斐の地誌である『甲斐国志』の記載内容をもふまえて、本調査の過程で考古学的手法による調査が行われた円楽寺の前身と考えられる七覚寺（五所権現）や富士山二合目の行者堂推定地と、逆に発掘調査が今後の課題とされた横根寺の2例をおもに取り上げ、文献史学の立場からコメントを加えたい。というのも、この2つの寺院は、中世前期の甲斐国を特色づける、中央権力との関係を含めた交通体系を解明していくうえで、現段階ではもっとも重要かつ典型的な事例と考えるからである。

1 七覚寺にみる南北交通と寺院

尾張大須真福寺所蔵の聖教奥書は、一部はすでに『大日本史料』等で翻刻され、『真福寺善本目録』でも元徳3年（1331）の「甲州八代郡向山郷七覚住侶僧寂巖」書写奥書などが紹介されていたが、近年の同寺所蔵史料の全面的な調査成果をうけて、『山梨県史』資料編6中世3下県外記録に「横根寺」「法善寺」など甲斐国関係分がほぼ網羅的に収録された。これらは、従来ほとんど知られることのなかった中世前期の甲斐における顕密寺院（とくに密教系）とその法流、さらに当時の政治秩序や地域編成のあり方との関係を考えるうえで、きわめて注目されるものである。

そのなかで最初に取り上げたいのは、八代郡向山郷の七覚山（七覚寺）である。単に「七覚」とも表記される同寺は、中世の富士信仰と深く結びついた五所権現（現在の五所神社）と一体であり、数多くの院坊から構成されていた。右左口に現存する円楽寺（五所神社の別当寺）は本来、この七覚山（七覚寺）を構成する一寺院であったと考えられ、中世寺院としては五所権現を含む七覚山で把握されるべきである。それは、山梨市万力の金桜神社（大宮権現、金峯権現とも）に所蔵される宝殿永正三年修理棟札に、「彼棟札、七覚山五所権現口口修理」

とあることから裏付けられよう。

本調査においては、七覚寺の後継寺院である円楽寺の六角堂および富士山北口の御室（二合目）の行者堂推定地について発掘調査を行い、また行者堂に安置されていた鎌倉末期の修復銘をもつ役行者像ともかかわる重要な寺院である。上記の大須真福寺聖教奥書（元徳3年）によって、この七覚寺が金沢北条氏の有力被官向山氏の本拠地に立地しており、そして同寺の住僧が尾張国の真福寺などと交流していた姿が浮かび上がってきた。

そもそも七覚の地は、信濃・甲斐・駿河を南北に結ぶ中道往還沿いに位置し、中世を通じて、政治・経済上の要地としての性格を一貫して持ち続けたことが各種史料から明らかである（『角川地名大辞典山梨県』など参照）。とりわけ、中世後期になるが、六十六部廻国聖の納札所として甲斐であげられているのが、この七覚寺と後述する横根寺であった。七覚寺がもつ宗教的な拠点としての性格と、そこに立地する、富士信仰と結びついた五所権現の列島規模での位置づけが注目される場所である。

七覚寺と一体の五所権現は、熊野・金峯・白山・伊豆・箱根の各権現から構成されている。周知のように甲斐には、9世紀前半の開山の伝承をもち10世紀の信仰遺物が確認される金峰山（山頂の蔵王権現）がある。そして、中世の金峰山への登拝路のうち、富士山を含めた甲斐国内の主要な霊山の尾根筋を縦走する入峰修行で使われた主要な4ルート（山口・万力・吉沢口・小笠原）には、大宮七社権現（金峯・白山・熊野・新宮・那智・走湯・箱根）や五所権現（熊野・新宮・那智・白山・箱根）、大宮七社明神などが立地している²⁾。とくに山口には、著名な柏尾経塚から出土した康和5年（1102）銘経筒内の経典が書写された「米沢寺」（米沢山雲峰寺）が、9世紀中葉の創建時に大和金峰山から勧請したという蔵王権現を鎮守として16世紀まで存在した³⁾。また、同経塚のある柏尾には中世の役行者像を伝える大善寺があり、その鎮守五所権現（熊野・新宮・那智・伊豆・箱根）が中世前期には確認できる⁴⁾。一方、七覚山の五所権現（熊野・金峯・白山・伊豆・箱根）は、熊野系の修験拠点ではあるが⁵⁾、甲斐金峰山の蔵王権現（金峯権現）を中心に富士山などを結ぶ回峰ルート＝甲斐の国峰とはやや異なる回路によって成立したように思われる。それは、どのようなもので、いつころの動きと考えられるであろうか。

熊野信仰と伊豆・箱根権現との強い結びつきは、近年の研究によれば鎌倉時代末期には確認できるとされており、さらに16世紀後半までには、伊豆・箱根権現に三島大明神を加えた二所三島参詣と熊野信仰との融合が確認されている⁶⁾。ただし、白山社の牛玉宝印を使った、建武2年（1335）以下の東大寺領美濃国茜部庄百姓等連署起請文（3通）⁷⁾をみると、神文の部分に「熊野・白山・伊豆・箱根・三嶋権現」とあり、少なくとも鎌倉時代末期の美濃国では、北部からの白山信仰にともなわれるかたちで熊野・白山・伊豆・箱根・三嶋からなる五所権現が百姓レベルの信仰対象として確立していたことが知られる。

この事実に加えて、前述した山梨市万力の金桜神社（大宮権現）所蔵の棟札によると、熊野・金峯・白山・伊豆・箱根からなる五所権現の社殿成立は12世紀末とされ、また七覚寺・五所権現の差配する行者堂がおかれた富士山二合目の御室浅間神社にあったとされる、日本武尊像および女神像の文治5年（1189）・建久3年（1192）の銘から伊豆権現（走湯山）覚台坊覚実との関係も指摘されている⁸⁾。七覚の五所権現の成立は、平安末期以前にさかのぼる可能性がきわめて高いといえよう。すなわち、12世紀初頭には確実な史料上で確認できる熊野先達の太平洋海運ルート上での活発な活動⁹⁾などを通じて、畿内で成立していた熊野・金峯・白山の三権現に対する信仰が伊豆・箱根権現と融合し、さらに伊豆（走湯）権現（鎌倉時代の同権現における白山講の信仰対象とされた不動明王が現存する）の真言僧の直接的な影響下¹⁰⁾のもとに、中世成立期における富士信仰の甲斐国内における拠点として、駿河・甲斐・信濃を結ぶ南北交通の動脈ともいえるべき中道往還の要地＝七覚で五所権現が設立された、というように推測したいのである¹¹⁾。

本調査による発掘調査で、七覚寺・五所権現の管轄下にある富士山二合目の行者堂の推定地から12世紀の土器が出土している事実もふまえ、同じく甲斐国内に所在する他の五所権現を含めて、中世における伊豆・駿河・甲斐・信濃の南北交通（さらには越後を経て日本海沿岸を通じた加賀白山とのつながりも視野に入れた列島縦断ルートとして）とのかかわりから、この七覚寺と五所権現の問題を今後さらに考えていく必要がある。

2 横根寺の成立と東西交通

真福寺所蔵聖教史料がもたらした、もうひとつの衝撃は、横根寺の発見である。すでに『山梨県史』解題でふられているとおり、横根寺は山梨郡横根の浄土宗光福寺（近世には伝行基作十一面観音、伝弘法大師作正観音が伝存していたという）の前身寺院にあたると思われる。『甲斐国志』によれば、この寺院は新羅三郎（源）義光が嘉保2年(1095)に空源を開山として真言宗の寂静院を創立したことにはじまり、天文16年(1547)に再建され寺号も改め浄土宗に転じたという。創立についての厳密な時期や新羅三郎義光との関係は不明とせざるを得ないものの、この真言系寺院としての寂静院の名が近世の地誌に伝承されていることはきわめて興味深い。

というのも、中世の真言系の「寂静院」といえば、高野山金剛峰寺の院家である寂静院（一心院）の名がすぐに思い浮かぶからである。そして注目されるのは、大須真福寺の横根寺関係聖教史料の書写系統の多くが、高野山金剛三昧院→高野山一心院（寂静院）を経て、鎌倉後期の横根寺における能信（大須真福寺の開山、武蔵国日野の高幡金剛寺を中興した儀海の弟子）の書写に至っている事実である¹²⁾。

これらのことから、『甲斐国志』にある山梨郡横根の寂静院の伝承は一定の史実を伝えるもので、おそらく同院は中世の横根寺を構成する一寺であり、鎌倉後期に高野山の金剛三昧院や寂静院（一心院）と能信らの法流を介して密接に交流していただけでなく、その建立自体が高野山寂静院（一心院）の強い影響下に行われた可能性も示唆される。

高野山寂静院は源頼朝の子息である高野法印貞暁が創立したもので、貞暁自身は仁和寺勝宝院の院主をつとめた。金剛三昧院が高野山における鎌倉幕府の宗教センターともいえるべき役割を担っていたこと¹³⁾も周知のとおりである。こうしてみると、古代以来の交通の要衝に立地する横根寺（寂静院を含む）は、仁和寺御室に統括される真言密教の法流がとりもつ僧侶や文物のネットワークのもとに、京都・紀伊（高野山）・尾張・甲斐・武蔵・鎌倉をつなぐ東西交通の結節点としても位置づけることができよう。

中世甲斐の荘園には、京都深草の法勝院領である市河荘（当初は免田荘園）や御室領である稲積荘をはじめ、仁和寺領荘園が比較的多くみられる¹⁴⁾。都鄙間交通を前提とした中世荘園の経営は、とりわけ現地経営の拠点として寺院を組み込む場合が多い。仁和寺領荘園の例でいえば、越中国石黒荘の柿谷寺が著名である¹⁵⁾。甲斐国の場合、寺院であるか否かは不明だが、鎌倉期の稲積荘（本荘・加納）には、仁和寺御室の本所年貢を集積する地頭政所の存在が知られ、朝廷と幕府の協調のもとで鎌倉幕府が実質的に統制しながら荘園年貢の収取・納入が行われていた¹⁶⁾。このような仁和寺荘園の経営と、横根寺（寂静院）のような幕府権力とも結びついた真言系寺院の創立・存続との関係を意識的に追究することが必要である¹⁷⁾。

なお、中世成立期における甲斐と仁和寺との関係の深さに加えて、鎌倉時代以降の幕府権力と甲斐の寺院は密接な関係にあるようで、その具体相については、別の機会に考察を深めることとしたい。前述のように、源頼朝や鎌倉幕府とのつながりが棟札や聖教などを通じて垣間見える七覚寺（七覚山）と横根寺（寂静院）は、やはり頼朝と強く結びついた由緒で語られる六十六部廻国聖の甲斐国内における納札所2ヶ所であるし¹⁸⁾、関東御祈禱所大善寺や東光寺の同時代史料、さらには牧荘などに色濃く残る二階堂道蘊（鎌倉幕府末期の有力史僚の足跡などが手がかりとなろう。

ただ、京都－鎌倉の公武政権によって維持された荘園制的な国家的秩序と、その前提となる都鄙間交通を背景に創立・維持された横根寺（寂静院）のような寺院は、『甲斐国志』に載せる伝承（天文16年に浄土宗寺院として再興）が語るように、おおむね15世紀後半から勢力が衰え、その多くが16世紀に廃絶していったと考えられる。これは前述した網野善彦の指摘のように、寺院に限らず甲斐国内に残る中世文書の特徴的な伝来状況と通底しているはずで、この大きな課題への取り組みを具体化させるためにも、本調査では実施できなかった横根寺の発掘調査等、考古学の研究成果との比較検討が急務となるであろう。

おわりに

以上、論題とは大きくかけ離れた、しかも中世前期の仁和寺・高野山ら真言密教系の寺院や幕府権力との接点

ばかりに集中してしまっただが、それは本調査に関わらせていただいたことを機縁に、これまでも甲斐の歴史のなかで史料制約ゆえに課題として掲げられてきた中世前期の問題、とくに交通体系の実態を含めた中央権力との関係について、寺院を通じて考えてみたい、という関心にもとづくからにはかならない。断片的な事例の羅列に終始した本稿の行間から、わずかでも一般化に寄与しうる方法論的内容を読み取っていただくと幸いである。

なお、中世寺院に関して文献史学と考古学の接点になりうる論点のひとつとして、最後にあげておきたいのは、湯屋の問題である。近年、文献史学・建築史学の分野のみならず考古学でも貴重な遺構発掘がつづき、中世寺院の宗教（潔斎や勤修の場）・政治（集会や蜂起の場）・経済（金融）すべてにかかわるセンター的機能や、寺院をとりまく周辺地域・民衆との接点として注目される湯屋であるが、14世紀前半の回祿記録にみられるとおり中世の大善寺にも「五間」の「温室」と湯釜の存在が確認でき¹⁹⁾、甲斐国内の他寺院でも同様な施設が立地していたと考えられる。今後、本調査をふまえて各地の中世寺院遺構の確認が具体的に進められていくなかで、この湯屋への着目はもとより、それにかかわる伝承や関連地名（たとえば旦過など）の収集²⁰⁾なども、意図的に行っていくことが必要である。

また、仁和寺のような首都京都および畿内近国に所在する権門寺社から未知の史料が新出する可能性も十分に期待できる。最近の例では、丸島和洋氏によって紹介された、高野山成慶院『甲斐国供養帳』中の最も古い時期（16世紀前半から17世紀半ばまで）の記事を有する『過去帳（甲州月牌帳）』²¹⁾に、中世末期～近世初期の甲斐国内に実在した寺院の一部が登場する。丸島氏作成の釈文からその寺院名と所在地名を抽出すると、

サイカシ（小松）、地藏院（東郡・山梨郡桑戸）、円通寺（嶋 甲府か）、来迎院（市川野中）、宝積院（桑戸）、七覚山、観音堂（平井）、宝聚寺（市河野中）、神宮寺（別保）、三輪寺（西郡）、常楽庵（東郡カウチ井ト）、神宮寺（市川）、金蔵寺（松本）、福寿院（市河）、石水寺（塩部郡、府中）、積翠寺（府中小松庄）、長徳院（市川カワウラ）、長宝寺（府中小松庄）、大蔵寺（府中御ミタイノ）、長法寺（府中）、トウヨウ坊（曾根芋沢）、鎮目宮（河東）、薬王寺（府中）、観音堂（モトス）、金光寺（市河）、善光寺（板垣）、善福寺（市川野中）、多門院（千塚）、広徳院（八代郡アイサワ郷）、持宝坊（府中）、長福寺（巨麻郡千塚郷塚本）、瑞泉寺（府中柳小路）、覚照院（嶋上条 中巨摩郡か）、

となる。文献史料からみた甲斐中世寺院研究の課題は、本稿でもその一端を試みたように、おもに県外所在の史料にある断片的な情報と、『甲斐国志』等の近世における伝承も多分に含んだ豊富すぎる情報との間隙を、どのようにして埋めていくかにある。上記の中世末～近世初頭における高野聖の活動を通して史料の世界に浮かび上がった寺院の姿は、ごく一部であるとはいえ、そうした中近世間の間隙（とくに武田氏領国としての秩序の解体から近世の幕藩体制の成立過程における寺院の存在）を埋めていく具体的な手がかりとなる。『山梨県史』の達成と課題をふまえて、さらに考古学や宗教史、美術史などの隣接分野と協力しながら、新たな史料の開拓と既知の史料を再検証する作業の繰り返しが求められる。

注

- (1) 網野善彦「総説」(『山梨県史』資料編4中世1県内文書、1999年)。
- (2) 山本義孝「甲斐における山岳信仰の研究の展望」(『帝京大学山梨文化財研究所報』第46号、2003年)
- (3) 『山梨県史』通史編2中世第十一章第三節「金峰山信仰の展開」の「信仰の歴史」(櫛原功一執筆担当分、山梨県、2007年)。
- (4) 柏尾山大善寺の鎮守五所権現(熊野・新宮・那智・伊豆・箱根)の成立は『甲斐国志』等によれば11世紀末というが、現存する確実な文書では13世紀後半になる。大善寺文書、正中3年3月25日関東下知状、暦応2年5月日大善寺炎上堂宇什物注進状案(『山梨県史』資料編4中世1、604・611号)。
- (5) 『廻国雑記』の伝えるように、熊野修験本山派の聖護院道興准后が同系列の拠点をめぐり、文明19年(1488)に七覚山円楽寺に逗留している事実を重視したい。宮家準『熊野修験』(吉川弘文館、1992年)。なお、本調査で円楽寺六角堂跡から発見された石造物の銘文にある「天文十七年 権大口口(僧都力)」もその延長線上で理解したい。
- (6) 阿部美香「熊野信仰と二所三島参詣」(『聖地への憧れ 中世東国の熊野信仰』神奈川県立歴史博物館、2005年)。
- (7) 東大寺文書・国立歴史民俗博物館所蔵文書(『岐阜県史』史料編古代中世三、茜部荘古文書)。なお、茜部荘故地の北東約4キロメートルほどの地点には権現山があり(岐阜城が築かれる金華山に連なる)、山頂に古代以来の由緒

をもつ白山権現が祀られている。加賀白山に連なる美濃では中世以来の白山信仰が色濃い。

- (8) 『山梨県史』通史編 2 中世第十一章第二節「富士信仰の盛行」（堀内亨執筆担当分、山梨県、2007 年）。
- (9) 著名な『長寛勘文』によって、12 世紀後半の八代荘の成立にあたり現地で多数の熊野神人たちが活動していたことを知りうるが、その前提には、12 世紀初頭以前から駿河を介して甲斐に進出していた熊野先達の活動があった。荒木敏夫「東の海つ道と伊良湖」（『静岡県史研究』第 3 号、1987 年）を参照。
- (10) 源頼朝以降、鎌倉幕府と密接な関係を有した伊豆権現、すなわち走湯山の密厳院は、鎌倉時代を通じて、いずれも東寺僧の覚淵→覚誉→覚意→覚玄→覚海→覚兼→覚遍と院務が相承された（永村眞「醍醐寺報恩院と走湯山密厳院」『静岡県史研究』第 6 号、1990 年）。御室浅間明神の神像銘にある走湯山覚台坊の覚実も、この法流につらなる僧侶である可能性が高い。なお、富士信仰をめぐる七覚山五所権現や御室浅間神社と伊豆権現とのかかわりについては、本調査の過程を通じて、清雲俊元・秋山敬両氏より種々ご教示をいただいた。
- (11) なお、たびたび取り上げた、甲斐金峰山登拝口の万力口にある大宮七社権現（金桜神社）の永正七年棟札から、中世後期には同権現と七覚山五所権現が何らかの関係の有していたことが窺われる。この問題については、きわめて制約の大きい文献史料よりも、近年新たな発見のあいつぐ信仰遺物をはじめとする考古学的成果の蓄積と緻密な分析が重要な知見を提供することとなろう。また、竹谷朝負『富士山の祭神論』（岩田書院、2006 年）で論じられるような、富士信仰をめぐる多様な祭神の性格と位置づけも重要である。
- (12) 福島金治「鎌倉松谷正法蔵寺小考」（『年報中世史研究』30、2005 年）。
- (13) 原田正俊「高野山金剛三昧院と鎌倉幕府」（大隅和雄編『仏法の文化史』吉川弘文館、2003 年）。
- (14) 甲斐の中世荘園については、網野善彦「甲斐国」（永原慶二他編『講座日本荘園史 5』東北・関東・東海地方の荘園、吉川弘文館、1990 年）、秋山敬『甲斐の荘園』（岩田書院、2003 年）を参照した。
- (15) 大山喬平「荘園制」（『岩波講座日本通史』中世 1、岩波書店、1993 年）。
- (16) 法金剛院文書、弘安 8 年 4 月 28 日仁和寺御室令旨案（『鎌倉遺文』15574 号）、正応 4 年 8 月 21 日導御書状（『鎌倉遺文』17665 号）、（正応 4 年）8 月 25 日仁和寺御室令旨（『鎌倉遺文』17668 号）。
- (17) 仁和寺領ではないが、鎌倉後期の石和御厨・石和荘では、大石和観音寺（大石和筋）の曼荼羅堂の院主職に「御得分巨多」が伴っているというように、同寺がこの地域における流通・富の集散地であり、金沢北条氏による同荘支配の政治的・経済的・宗教的な拠点となっていたことが『金沢文庫文書』から指摘されている。福島金治『金沢北条氏と称名寺』（吉川弘文館、1997 年）を参照。
- (18) 湯之上隆『日本中世の政治権力と仏教』（思文閣出版、2001 年）。
- (19) 注（4）所引暦応 2 年 5 月日大善寺炎上堂宇什物注進状案。
- (20) 服部英雄『地名の歴史学』（角川書店、2000 年）、榎原雅治「中世地方都市の空間構成—阿弥陀・薬師・旦過・風呂—」（服部英雄編『中世景観の復原と民衆像—史料としての地名論—』花書院、2004 年）を参照。
- (21) 丸島和洋「高野山成慶院『甲斐国供養帳』—『過去帳（甲州月牌帳）』—」（『武田氏研究』第 34 号、2006 年）。